

医療の架け橋

日本・ミャンマー医療人育成支援協会

ミャンマーの首都ネピドーにある総合病院。先天性の口唇裂、やけどで動けなくなった手足や顔、皮膚の腫瘍、顔面マヒなど、さまざまな症状を持った子供からお年寄りまで多くの患者が集まった。NPO法人「日本・ミャンマー医療人育成支援協会」(岡山市)の木股敬裕・岡山大教授(53)ら形成外科医と脊椎外科医の計7人は、今回の訪問で現地の医師らと協力し4日間で計約50件の手術をした。

体の表面にある異常や変形を治したり、失った機能を取り戻したりする形成外科医は、日本に2000人以上。一方、ミャンマーでは形成外科医を育てるシステムがなく、海外で学んだわずかな数の形成外科医がヤングやマンダレーの大都会

市、首都ネピドーにのみ。同会の岡田茂理事(71)は「命に別条がなければそれ以上の治療はせず、一生涯の不自由を背負う人が山ほどいる。意欲ある若手医師も学ぶ機会がなく、最も充実させなければならぬ分野の一つ」と、昨年1月から年2回、現地に形成外科医らを派遣して手術をしながら医療技術を伝えている。「日本の終戦直後のような」(木股教授)医療環境で、器具はほとんど日本から持参する。

初回から参加し、これまでに150件以上の執刀をしてきた木股教授のもとを、今年1月にヤングンで手術した20代の女性が訪れた。カマで切られ唇をなくした女性に、皮膚と脂肪で唇を形成し、今回ネピドーの病院

課題一フォロー術後深刻不足と共に器具

◇中◇

で修正手術を施した。旅費や薬代などが賄えず、女性のように術後に病院で再び受診できるのはまれで、経過を確認できなかった。一フォローがで

現地の医師に技術指導しながら手術をする岡山大の医師ら
 井川卓朗さん撮影



にならなければ本当の支援にはならない」と話す。また、カルテなどの情報をデータベースで残すことで、ミャンマーでどういった疾患があるか、どのような分野を優先して医師を育てなければならぬかが分かるという、やりっ放しにならないことが重要と説く。

初めて同行した岡山大医学部5年の井川卓朗さん(28)は「日本であればとくに処置されているような事案が野放しにされるなど、切実に医療を求め人の姿を目の当たりにし、日本が恵まれていること、医療の大切さを改めて自覚した。最先端の技術を伝えるだけでなく、ミャンマーの人たちの価値観を壊さないで100年先を見据えた医療を現地の人と一緒に考えていきたい」と話す。

12月からは、ヤングン大学の若い女性形成外科医が、岡山大で研修を受ける予定だ。木股教授は「これから民主化が進んで急激に医療が進歩する中で、どのような方向性を歩むのか」。ミャンマーの行く末を注視している。

【村本聡】

形成外科医ら派遣